



古道が紡ぐ物語



聖徳太子ゆかりの筋違道（太子道）周辺を訪ねる① ～ 橘寺から小墾田宮推定地まで～

奈良盆地に引かれた古代官道は東西南北方向に真っ直ぐ走る道が多い中、南北方向から西に約 20 度斜行した珍しい道があります。建物を補強する筋交いに喩えて「筋違道」と呼ばれるこの道は、聖徳太子が移り住んだ斑鳩と、推古天皇が執政した小墾田宮のあった飛鳥とを直線的に結んでいたと推測されています。「太子道」とも呼ばれ、聖徳太子にまつわる伝説も残る筋違道沿道を訪ねます。

聖徳太子ゆかりの地が残る筋違道沿道

■正確なルートが明らかでない筋違道

筋違道は、聖徳太子一族の根拠地であった斑鳩と、推古天皇・聖徳太子らの執政の場である飛鳥とを直線的に結び、南北直線方向から西に約 20 度斜行する古道であったと推測される。

斑鳩から田原本付近までは、比較的痕跡が明確に残された箇所があるものの、橿原付近では藤原京の建設や条里制の地割等で完全に失われ、現在その正確なルートをたどることは難しい。

今回は、聖徳太子出生地と伝わる橘寺から、筋違道の起点であったと思われる小墾田宮推定地まで、点在する史跡を訪ねたい。

■太子の出生地と伝わる橘寺

太子建立七大寺の一つ、橘寺（高市郡明日香村橘）。蘇我馬子の墓と目される石舞台古墳の北西に建ち、寺伝によれば欽明天皇の別宮・橘の宮の故地であり、太子出生の地とされる。

『日本書紀（以下書紀）』は太子の生年、出生地等について詳しく記していない。一方で「母・穴穂部間人皇女が馬司の厩戸に当たった拍子に難く生まれた」、「生まれてすぐ言葉を話した」、「一度に 10 人の訴えを聞き、それぞれに的確に答えた」等の伝説を伝える。

太子は死後、聖人として崇められ信仰の対象となった。平安中期には、太子伝記の集大成として『聖徳太子伝暦』が成立。太子を救世観音の生まれ変わりとする等、誕生から活躍、死後の一族滅亡に至るまでを伝説を交えドラマティックに描き、

太子信仰の基盤となった書である。

■元興寺伽藍縁起の残る飛鳥寺

橘寺から伝飛鳥板蓋宮跡（明日香村岡）を右手に見ながら北上すると、まもなく飛鳥寺（明日香村飛鳥）が現れる。

飛鳥寺は、法興寺・元興寺との別号が表すように、蘇我馬子によって日本初の本格的な伽藍を持つ寺院として建立された。

『書紀』によれば、崇峻 3（590）年に着工した飛鳥寺は、推古 4（596）年に堂塔のすべてが完成。この時、蘇我馬子の子・善徳が寺司となり、太子が師と仰いだ高句麗僧・慧慈らが寺に住した。しかし安置すべき本尊がないため、推古 13（605）年に鞍作鳥（いわゆる止利仏師）が丈六（約 4.85m）仏を作り始め、翌年に完成したという。飛鳥寺の由来を記した『元興寺伽藍縁起并



太子出生の地と伝わる橘寺（明日香村橘）（左）



日本最初の伽藍を持つ本格的寺院として営まれた飛鳥寺（明日香村飛鳥）（右）

『流記資財帳』は、仏像の完成を609年としており、こちらが定説となっている。

飛鳥寺の造立は足掛け20年にもおよぶ大事業であったが、これは当時としては異例のスピードであって、蘇我氏の権勢の一端が窺える。

その後飛鳥寺は平城遷都（710年）に伴い、現在のならまちに移転し元興寺（奈良市中院町）と称した。移転後も、飛鳥寺は本元興寺として存続したが、鎌倉時代に天災で大きな被害を受け衰退、再興されたのは江戸時代のことである。

■仏教伝来の地とされる豊浦寺跡

飛鳥寺から、飛鳥の小盆地一帯を見渡せる甘檜丘を左手に見ながら北西に歩を進めると、豊浦寺跡に至る。かつてこの地には蘇我馬子の父・稲目の向原邸があったという。

『書紀』によれば、欽明天皇13（552）年に百済の聖明王より仏教が伝来された折、積極的な仏教受容を唱える蘇我稲目が、向原邸に仏像を安置したとする。その意味でこの地は「仏教伝来の地」といえる。

排仏派の物部氏との抗争により、向原邸は焼かれ灰燼に帰したが、最終的には崇仏派の蘇我氏が勝利。592年、蘇我稲目の孫で馬子の姪にあたる推古天皇が即位する。その際ここに「豊浦宮」が置かれ、太子は推古天皇や馬子とともに執政にあたった。

推古天皇11（603）年10月、小墾田宮に宮が移った際、豊浦宮跡は蘇我氏に下賜されて豊浦寺が建立された。その後は710年の平城遷都に伴い衰亡し、現在は豊浦寺講堂跡に再興された向原寺の前に、豊浦寺跡を伝える看板が立っている。



向原寺前の豊浦寺跡を示す標識（明日香村豊浦）

■推古天皇と太子が執政した小墾田宮

『書紀』によれば、小墾田宮に移って2か月後の推古11（603）年12月、「冠位十二階」が制定される。翌年4月には、太子自ら作った「憲法十七条」が発表された。異質なのは、『書紀』に「和を以て貴しとなす…」から始まる憲法全文が掲載されている点で、書紀編纂者の強い意図を感じる。

これら歴史の舞台となった小墾田宮については、これまで古宮土壇（明日香村豊浦）がその故地と考えられてきた。しかし近年、雷丘東方遺跡の井戸から「小治田宮」と墨書した土器が出土したことから、奈良時代の小治田宮がこの雷丘周辺（明日香村雷）にあったと推定されるに至った。それに従い、推古天皇と太子が執政した小墾田宮も当地にあったことが有力視されている。（次号に続く）
（太田宜志）

